

つながる、前へ進む。

Gain

●通巻001号 2017
創刊号 No.1

特集

沖縄支社
躍進の
ヒミツ

Gain No.1

2017年1月1日発行（通巻1号） 発行／株式会社コミュニケーションズ・イン 社内報 編集部
〒160-0022 東京都新宿区新宿4-3-17 FORECAST 新宿SOUTH6階 TEL:03 (5936) 4357

Identity of the company

Gain's VISION

短い会議

早さ、軽さ、私たち流



当社の会議は朝に昼に数が多い。しかし、その時間は基本的に短い。議論は常に闊達。積極的な提案にあふれ、その採用から実現までのハードルは低い。すぐに、「よし、やってみよう」となるのだ。これが良いのか悪いのか、その判断は結果のみぞ知ることとなる。ただ、すぐに動かして、ダメならダメ、良いなら良い。その判断も同様に早い。いつでも何かが動いており、ダラダラするような時間は生まれてこない。ダメでもともと——ではないのだろうが、とにかく失敗を恐れない。というか失敗を前提にすらしているところすらある。中途採用者などは、この早さと軽さに最初驚いてこう言う。「アクティブすぎる」

もしかしたらこれは褒め言葉なのかもしれない。短さ、軽さ。これは私たちの武器だ。何にでも軽く挑戦していける土台は、こんなところに見られる小さな文化の結晶なのかもしれない。だから大事にしよう。そして身軽に挑戦を続けよう。失敗は許される、挑戦しないことは許されない。そんな企業文化って、ちょっといいと思う。



内勤者Focus!
沖縄支社を支えているのは私たち♪

今は2名のスタッフでバックオフィス業務を切り盛りしています。営業で前線にでている皆さんの顔が最近すごい元気です! 成績も好調なので私たちも大忙しでうれしい悲鳴。「疲れたー」とつぶやいていると、支社長がさーっと飲みにおいしい店に連れて行ってくれたり…。いつもごちそうさまです♪



写真右：大柿真理さん、写真左：新谷英子さん



沖縄支社のホントのところ

ぶつかった! まとまった♪

沖縄支社 支社長 **金城時宗さん**

抜群の目標達成率を誇る沖縄支社。
数年前までは完全アウェイと言われていたこの地で
彼らはどう奮闘したのか? そこには「人」が輝く物語があった。



空気を讀まないでいこう

最初に赴任してきて思ったことは、太陽と海とは対照的に、ちやうと元気がなかったんですよね、みんな。支社内での交流も少ないし、飲み会みたいなコミュニケーションもあまりなかったように見えた。だから僕の仕事は、まずはこの沖縄支社を「チーム」にすることだと思っただけです。といっても、僕ががんばってもチームにはならない。チームっていうのは、支社個人個人の意志とか決意とかが共有されて初めてなれるもの。だから、それまでのこの支社にあった伝統とか常識で、チーム化を妨げているようなものは全部外しちゃおうと決めたんです。部課や職制の垣根とかね。

最初は反発されました。「えー」とか「めんどろだな」ってみんなが言ってるのもわかってました。でも、ここで変に空気を讀んで迎合してもまったく前進がないままで終わってしまう。だから敢えて空気を讀めない男、空気を讀まない男で行こうと決めました(笑)。

なんとなくまとまりが見えてきた:と思ったら、そこからはすぐ早かった。直行直帰ばかりだったメンバーが支社に普通に顔を出して情報を交換したり、そのまま飲みに行ったりする光景が

当たり前になってきた。みんな、仲間になりました。最初は、みんな、最初から。「仲良くしないのが苦手」な連中ばかりだったんです。まあ、その間支社のメンバーそれぞれの間で、いろいろな物語があったんだと思います。衝突があったことも聞いています。でも従業員に対する信頼はゆるぎませんでした。ね。「大丈夫だ、最後は絶対に最高の仲間になれる」ってね。

そして結果が伴ってきた。当たり前といえば当たり前です。個人のチカラだけでやってきた仕事に、今は背後の大勢の見方がいる。「仲間」になって生まれるシナジーは1+1が2になるのではない。3や4、10にもなっていくわけです。だからさらに楽しくなってくる。

最高の仲間がいて、楽しい仕事がある。沖縄支社は、今とてもいい状態です。こつなると僕もさらに空気を讀まずに、無茶に挑戦したくなる。部下が「そんなの無理ですよ」というと逆にワクワクする。それをひっくり返すのはとても楽しい仕事だからです。

でも最近は、「無理ですよ」じゃなくて、「やりましょう!」と返ってくるのが多くてね…。うれしいんだけど、ちょっと物足りないというか…。



ブランドは
従業員の心から生まれる

株式会社コミュニケーションズ・イン 代表取締役社長

高橋 健

重厚からの脱却
私はできると信じています

株式会社コミュニケーションズ・イン 広報部

井上直樹

創刊号でしかできない座談会

伝えたい まずは社内報で挑戦します

そもそも当社に社内報は必要なのか？

スタートはそこでした。

でも伝えたいものは、ある。

会社のこと、未来のこと、誇り、ブランド etc...

社内報ならできる——、それが原点です。

——社内報は必要なのか？

高橋 今当社のグループにはさまざまな社内報のメディアがあります。グループ報にWEB社内報。これらをしっかりと読むことで、グループなかで何が起こっているのか、だいたい抑えることができる。でも株式会社コミュニケーションズ・インの従業員がフォカスされることない。この社内を細やかに知る術は、現時点ではない。その役割が果たせるのは何かという話になる。

宇野 社内報：ですが、今グループ全部を見渡して、果たして精読率や閲覧率の点から果たしてどのくらいの効果があるのかという問題がでてきますね。

態なんでしょうね。

江藤 それ答えはないですよ。人によって求めるもの違うと思います。

井上 「勝つ」のは結果ですよ。で、「楽しく」は過程…。

宇野 それが何かを考えると、考えてもらえるような記事をつくっていくのは社内報でできることですね。江藤 そういう事例だけで、風土つてできるのかな？

宇野 でもそういう記事を読んで「へー」って思ってもらいだけでも、進歩の階段は登れると思います。それが積み重なればもともと良い会社になれるんじゃないかと。

高橋 良い会社って何？

宇野 それは…。

江藤 それも答えはないですね、

江藤 私も、よくいるタイプだとは思いますが机に置かれた社内報、だいたいパラっとめくってそのまま上に書類が置かれていつて埋没してしまう感じでした。しっかりと読んだという記憶はあまりありません。

高橋 多忙はわかる。読んでいる暇も惜しいもんだよね、実際は。あと机で社内報を読んでいると上司が「何さぼってるんだ」なんて



人によって違って当然。

高橋 しかし組織である以上、共通の軸はなければならぬ。そのうえで「楽しく勝つ」というのは良い言葉だね。きつと楽しいし、やりがいもあるんじゃないかな。井上 作るほうも楽しまないといけませんね。

宇野 それは、みなさん得意じゃないですか！

一同 お前もな！

ことを言われたりすることもなきにしもあらずだろう。

井上 忙しい、興味があまりない、読む雰囲気もない…、読まない理由はあるけれど、読まれない社内報であつたという面もあるのでは？

宇野 作りやデザインの面という

意味ですね。同感です。駅で置かれていてフリーペーパーなんかは取って読んでもらうためにいろいろ工夫がある。

江藤 でもフリーペーパーみたいなものを作っても、そこまで中身を詰め込むことができないですよ。井上 かといって文字ばかりの『AERA』みたいな社内報を作っても、それはそれで伝わるメディアなのかというと違う。

楽しく勝つ！
これを新しい社風にしたい

株式会社コミュニケーションズ・イン 営業部

宇野りさ

社内報は、読んでこなかった
その理由を突き詰めて挑戦する

株式会社コミュニケーションズ・イン 営業部

江藤 悠

作る、築く、支える、
進む、育てる、
——そして楽しむ!



若い頃、大人になった後の人生を考えた時、ほとんどの時間は仕事だから、その時間は好きな仲間たちと楽しく過ごせたらいいなと思っていました。

本来は、まず目的があつて、それを達成するために手段がある。だから、普通はその手段を最適化しようと思うのですが、僕は最適化するよりも、そこに向かうプロセスを楽しむほうが良いと思います。幸福というのは、シンプルな構造でできています。目的を自分の好きな仲間たちと共有して、その目的に向かうプロセスを共有すると、人生は楽しいし、幸せを感じるものだと思うんです。

また、仲間を大事に思う感情というのは、状況が作りだすものだと

しゃちょう'ず Bar 連載第一回

まだ自分の青春を終わらせたくないんです

思っています。例えば、『ONE PIECE』の麦わら海賊団。船長のルフィは船が操縦できなくて、航海士のナミがいないと死んでしまうので、仲間は絶対的な存在です。そういうふうに、生きるために仲間が絶対に必要な状況、かつ、そんな仲間に迷惑をかけたくないから共に成長していくというのは、理想的な状況だと思っています。私自身もそう生きたいと思っていますし、この新しく若い会社もそんな社風になればと思っています。

ちょっとくさいですけど、どんなに見苦しいと言われても、私は自分の青春を終わらせたくないんです。

もういい年ですけどねえ(笑)

高橋 健

新部署で新たな仕組みづくりにチャレンジする、仲間に愛される癒し系上司にしてエースの鈴木ひろ美さん
見据えるその先にあるものは何か――。

鈴木ひろ美さん

奇跡なんて大げさです。でも狙ってはいました!

Buddy (バディ)――。

彼女は昨年、あるクライアントが提示した中期経営計画に基づく店舗開発のプレゼンに参加。10社以上に競り勝ち、日本とASEAN諸国での開発計画に参加することになった。

『この当社の社運を賭けたプロジェクト。そのための「バディ」が君たちだ』とお客様に言っていたんだんです

そういつて鈴木さんは笑った。

今回の案件は、元来当社の守備範囲からはかなりそれるもの。いわば、競争のなかからみれば圏外とも言える状況だった。そこからの巻き返しは、周囲から見ても「奇跡」といえるほどの大逆転だったという。

圏外からバディになる物語。鈴木さんはいとも簡単に紡いでみせた――かのように見えた。

だが真実は違った。最善の努力、最高のスタツフ、最良の方策、すべてにベストを尽くした結果だった。部下や親しい同僚たちは皆知っていた。

これは奇跡などではなく、必然の結果だったのだということ。

部下同僚に聞きました 鈴木さんってどんな人?

目標実現までのルートがいつも最短距離です。でもあんまり、計算しているようにはちょっと見えません。スゴい!!



高田雄一
(写真左から二番目)



黒田有五
(写真右から二番目)

部下ははっきりいってハードジョブです。でも不満を抱えている人間はいません。目指すべき上司像です。



駒沢理子
(写真左)

小さな企画一つでも、簡単には通してくれませんか。でも指摘されるポイントが完璧に正しい。私、成長してます!



本田翔子
(写真右)

お酒を飲むと、すぐに酔います。そしてさらに美人さんになります。笑いましょうで楽しい話ばかり。大好きです。

編集後記

創刊号、なんとか無事に発行までこぎつけられました。こんなふうになりたい、あんなふうになりたい、そんなことを考えていたらあつという間に時間が過ぎてしまいました。発行した今でも、その問題意識は絶えず頭にありグルグルしています。この会社には籍をおく人には、全員幸せに楽しく元気に働いてほしい、そんなことをこの社内報担当になって初めて思いました。これから良い冊子にしていけるよう、がんばります。『Gain』をよろしくお願いします!! (M.O)

内報担当を拝命してから、友人知人のツテや編集会社の協力などを経て、いろいろな社内報を見せてもらいました。でもそのなかで、読みたくなった社内報はありませんでした。醸し出される当たり前の社内報感、詰まった文字、まじめで優等生的な記事内容、僕が創りたいのはこんなものじゃない!! 絶対に社員のみんなが読む、ファンができるくらいの社内報を作ってやる! その挑戦の第一歩がこの創刊号です。 (K.T)

採れたて! Gain 川柳

日頃のお仕事、貯まるストレス
ちょっとひねって、クスッと笑って…
採れたて川柳、
今回のお題は「上司・部下」です

今号の特選

胸騒ぎ
上司が敬語で
俺を呼ぶ

大江山の鬼

【コメント】 状況が目には浮かびます。寒気がするのには汗が…。

言つたよね聞いてないです そんな指示

たんたん

ハイと言うあなたはいいけどやるのオレ

平社員

イケメンでならした部下は今イクメン

カニゾウ

おやじギャグ 部長自慢で 部下我慢

陣六